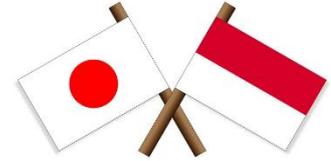


SSHインドネシア海外研修

令和 7 年 1 月 25 日（土）から 2 月 1 日（土）にかけて、初めてのインドネシアでの海外研修が実施され、2 年生 10 名が参加しました。



初日は JR 仙台駅を出発し、新幹線と成田エクスプレスを乗り継いで成田空港へ。空港近辺で一泊し、翌 26 日にインドネシアに渡航してから本格的な研修が始まりました。主な研修内容を紹介します。

インドネシア文化体験・ものづくり体験

研修初日、私たちはインドネシア郊外にある Kampoeng Wisata Cinangneng を訪れ、インドネシア文化に深く触れることができました。

はじめに、私たちはスダ族に伝わる竹製の民族楽器アングルンを演奏した。アングルンは竹の杵に筒状の竹が組み込まれた楽器で、竹ならではのコロコロとした柔らかい音色が心地よく、それぞれ異なる音階を持つアングルンを用いて一つの曲を合奏する体験は非常に有意義だった。

その後、私たちはジャワ島の民族衣装を身につけた。男性はブスカップと呼ばれるバティック柄のジャケットを、女性はクバヤと呼ばれるレース状で丈の長いブラウスを着用した。バティック柄は魚介類や海産物など島の自然資源への感謝の気持ちを込めて作られたものであり、現地の人々の生活と繁栄を象徴しているようだ。どちらの衣装も宗教的な理由から肌の露出を抑えたデザインになっており、私たちにとってはやや蒸し暑く感じられた。

昼食を取った後、私たちは田植え体験と水牛の水浴び体験を行った。現地の田んぼは水が張られており、土の感触や稲の様子は日本の田んぼとよく似ていた。インドネシアの米の生産量は日本の約 2 倍にも及び、田植え体験を通してインドネシアの食文化を学ぶとともに、普段何気なく食べているお米への理解を深めることができた。

その後、私たちは水牛の水浴び体験をした。現地の人々にとって水牛は非常に重要な存在で、水牛は毎日川に行き、水浴びをする習性があるようだ。実際に触れてみると、その肌はざらざらしていて冷たく、貴重な体験となった。

こうした文化体験を通じて、インドネシアの伝統や生活様式について深く学ぶことができた。



Iykra 訪問

研修2日目、私たちは Iykra というインドネシアの情報分析・コンサルティングを行う IT 企業を訪れ、社会で活用されている情報技術や、Iykra が取り組んでいるプロジェクトについて講義を受けた。

この体験を通じて、人工知能や IT に関する知識を深めることができただけでなく、AI を活用したビジネスモデルについても学ぶことができた。得られた知見を今後の研究に活かしていきたい。



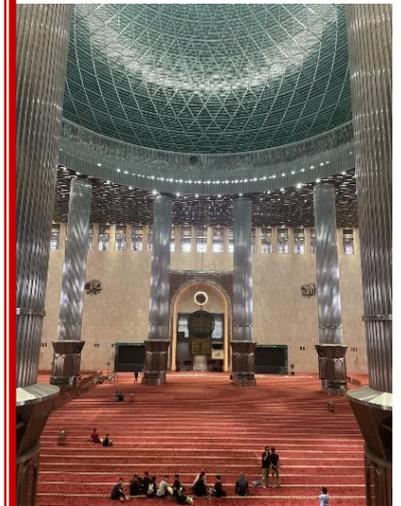
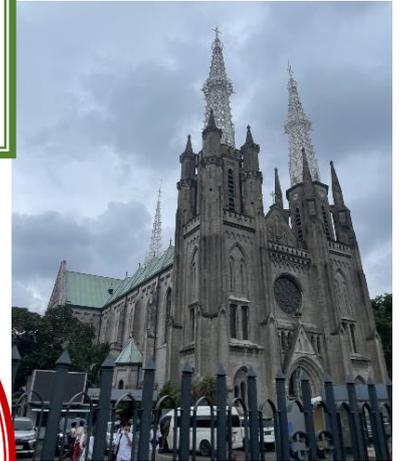
ジャカルタ大聖堂・イスティقلال大モスク

インドネシアの宗教は、イスラム教が大半を占めるが、キリスト教やヒンドゥー教も広まっている。ジャカルタ大聖堂はキリスト教の教会で、その壮麗さに圧倒された。堂内にはたくさんの椅子が並び、奥には美しく装飾された祭壇がある。壁面には多くの絵画が飾られ、それぞれに深い意味が込められているようで、一つ一つの絵の意味を考えたくなるほど魅力的である。右手にはイエス・キリストの像があり、その前にはたくさんのろうそくが添えられていた。私たちも実際にろうそくに火を灯し、無事に帰れるようお願いを込めた。その願いが叶ったのか、無事に帰国することができた。

次に訪れたのは、イスラム教の礼拝所であるイスティقلال大モスクである。ジャカルタにあるこのモスクはアジアで3番目に大きなモスクで、1番目と2番目はメッカとメディナにある。世界史を学ぶ者にとっては納得の順序である。モスクに入る際、女性はヒジャブという頭を覆う布を着用する必要がある。これはイスラム教文化の一環で、女性を危険や害を及ぼすものから守るためのものだそうだ。また、全員が靴を脱ぎ、裸足で入場する。広々とした堂内は静寂に包まれ、ドーム状の大きな礼拝堂が印象的であった。ふかふかのカーペットが敷かれた礼拝堂では、ムスリムが一列に並び礼拝を行う。一度に約10万人が礼拝できる広さを誇る。さらに屋外にも礼拝スペースがあり、タイルで区切られた四角いスペースに一人ずつ入り、メッカの方向に向かって礼拝する。

モスクには大きな太鼓もあり、これはインドネシア独特のイスラム文化の象徴である。礼拝の際に使われるこの太鼓の音は、祈りの時間を告げる重要な役割を果たしているそうだ。

日本ではなかなか見ることのできない壮大な建築物を数多く見学でき、とても貴重な経験となった。特に世界史を選択しているメンバーは終始興奮し、この体験を通じてイスラム教への理解を深めることができた。今回の訪問は、苦手意識を持っていたイスラム文化について学ぶ大きなきっかけとなり、今後の学習への意欲も高まった。



ポスブロック

ポスブロックは、元郵便局の建物を利用した商業施設である。日本語では「切手堂」と訳され、郵便の窓口だった場所が小さなお洒落な店に生まれ変わっている。かつての待合スペースには大きなスクリーンと階段状の椅子が設置され、観光客がくつろげる場となっている。歴史を残しつつ現代的にリノベーションされた空間は、日本にはない独特の魅力がある。

1階には服屋や雑貨屋、カフェ、本屋、レストランなどが並んでいる。私たちはそこでセジユク麺というインドネシア版ラーメンを食べた。あっさりとした鶏がらスープに麺と鶏肉をつけて食べるスタイルで、日本の味を思い出させる美味しさであった。

2階にはライブステージがあり、イベントにも利用されている。郵便局の建物に本格的なステージがあることに驚かされた。ライトやスピーカー、バックスクリーンも備えられ、歴史的な外観からは想像できないほどしっかりした設備が整っている。

日本でも歴史遺産を保存するだけでなく、ポスブロックのように商業利用する方法も興味深いと感じた。

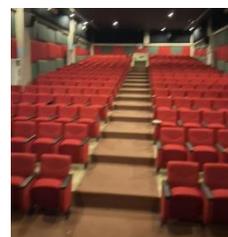


現地高校生との交流

4日目は現地の高校（SMA Global Mandiri）での交流と研究発表を行った。高校に到着してイベントホールへと案内されたあと、まずはセレモニーで現地の高校生から歓迎の意を込めたパフォーマンスを披露された。私たちとあまり年齢が変わらないにも関わらず洗練された演技に感動し、言葉だけでなく、気持ちの部分で彼らの伝えようとしていることが伝わってきた。

セレモニーの後には、現地の高校生の案内で校内のツアーが行われた。私立学校ということもあり施設は非常に整っていたが、その中でも校内にシアターがあることにはとても驚かされた。シアターの規模は100席以上あるらしく、演劇などで使用しているようだ。また、実験器具がたくさんある実験室や様々な言語の講座が開かれているなど、インドネシアの教育水準の高さを実感した。特に驚いたことはインドネシアの人々の英語の言語能力が高く、英語を話すのがとても速かったことだ。私たちも最低限には英語を練習してこの研修へと臨んだつもりではいたが、世界の人々と比べるとまだまだだと痛感した。

校内ツアーの後には研究発表や高校紹介などを行い、私たちの研究内容や各校の特色、文化を知ることができた。外国の同年代の人と交流をすることができたことはとても貴重な機会なので、この経験は必ず将来に生きてくると思う。さらに、帰り際には日本のアニメ談義で盛り上がり、日本文化の海外での知名度のすごさを知った。ちなみにインドネシアでは「進撃の巨人」が人気なのだそうだ。



PT. Paragon Technology and Innovation ・化粧品会社への訪問

研修最終日は、インドネシアの大手化粧品会社である「PT. Paragon Technology and Innovation」を訪れた。この会社は1985年に設立され、Wardah, Make Overといったハラル認定のブランドを展開している。昨年は「TikTok Awards Indonesia」を受賞するなど、数々の賞を受けていることに驚いた。

訪問中は、まず会社の概要についてお話を伺い、その後、デスクワークの様子を中心に社内見学をさせていただいた。パソコンを使って仕事をしており、日本のオフィスと大きく変わらない印象を受けた。特に印象的だったのは、社内にプールが設置されていたことだ。仕事終わりに社員がリフレッシュする目的であった。こうした環境であれば、仕事もより効率的に進められるのではないかと思う。見学の後には先日と同様に発表を行った。どちらの発表もスムーズにでき、しっかりと内容を伝えることができたと思う。



デザインシンキングに関する講義とケーススタディ

午後は、インドネシア大学の工学部にてデザインシンキングに関する講義を受講した。デザインシンキングとは、デザインプロセスを応用し、問題・課題解決に役立つ思考法である。この手法は、多くの企業や組織で活用されていて、問題の分析から解決策の想像、試作、試験というプロセスを繰り返し、より優れた解決策を導き出すことが重要であることを学んだ。途中でつまづいた際には、その段階に戻って再度考え直すというアプローチが最終的な成果物の質を高める鍵であることが理解できた。私たちも、この手法を自分たちの研究活動に取り入れたいと思った。

講義後は、実際にデザインシンキングを用いてグループワークを行った。工学部の大学生たちと一緒に身近な問題を一つ挙げ、解決するためのアイデアを考えた。解決策を出すのは容易ではなく、考えが行き詰まることもあった。また英語でグループ内の大学生とコミュニケーションを取りながらであり、難しかった。しかし、進めていく後に楽しさが生まれ、大学生のサポートを受けながら取り組むことができ、最終的には達成感もあった。この経験は大変貴重なものであり、一人一人が積極的に取り組むことができた。

